

障害—病気の負価値性について

私は長年、今の社会で当然とされる障害そのものの負価値性について、そのこと自体に疑問を呈して来た。

そういう中で、どうしても答え切れない場面に幾度かで食わせて来た。そのことをここで問題にしてみたい。

その内の一つは、私自身が属する吃音者の集まりで、吃音を治したいとの思いとの直面である。そのような思いにとらわれている人たちに、「障害そのものの負価値性から問題にしていく必要」という論旨を展開してもほとんど通じない。障害が負価値性をもつということは単なるその当事者の思い込みではない。そういう意味では私自身も含め多かれ少なかれ「無意識」としてそのようなとられの中にある。(注)

実際に今の社会に凡通的なことで、社会を変えるという指向性から見ないとそのことはとらえられない。また、社会が変え得るという展望まで示し得ないとき、「障害そのものの負価値性から問題にしていく」という論理は有効性をもち得ない。

同じようなことは、他の障害についても言える。しかも、その障害について、非当事者である場合、何も提起しようがない現実突き当たる。例えば、「聞こえる者に聞こえない者の世界が分かるのか？」という突き付けである。確かに「分からない」ということしか応えようはない。しかし、しかし、例えば「聞こえない者の世界」ということで言われることの中身はなんなのだろうか？「聞こえないことの辛さ」という意味なのだろうか？そのことは理解できない。というより、何が問題になっているのか理解できない。それは聞こえないということ自体の辛さということではないのではないか？それは、比較したところで、何々できないという問題ではないのだろうか？敢えて言えば「何々できないということ自体の辛さ」という問題ではないのではないだろうか？なぜ比較ということが起きてしまうのだろうか？むしろそのこと自体が問題になるのではないだろうか？

このことは、重度—軽度という障害者の分断の中で問題になることでもある。いわゆる重度の障害者から、いわゆる軽度の障害者に、自分たちその辛さを軽度の者は理解できないというような主旨の反応がでてくる時がある。そり辛さとは何であろうか、一般的に語ることは難しいにせよ、敢えて語ってしまえば、介助の必要性が大きいということではないだろうか？そこには一つの論理の飛躍がある。論理の飛躍というよりは、障害者運動のおかれている限界的現状ということではないかと思う。すなわち、障害者と真に共に生きようとする介助者が少ないという現状、更に色々な社会の壁の中で、自分の行動がせばめられる、何々できないという問題が起きてしまうということではないか、と思う。だから、重度—軽度という分断が起きてしまう。というより、障害者ということが異化すること自体がそのような問題としてあるのではないだろうか？

これが根源の問題だと思う。しかし、そのうえで、なおかつまだ語り切れないような「しこり」が残ってしまう。それは病気の問題、とりわけ病気に付帯する痛みの問題と死という問題である。

障害者運動の中で、具体的に誰の提起か記憶が定かではないが、障害の負価値性ということについて、それは、病気ということと、死ということの負価値性の問題から掘り下げて問題にしていかなければならない、という提起があった。

死の負性ということについては、現代人の間ではかなり普遍性があるけれども、例えばキリスト教の世界でも、「神に召される」などと必ずしも負性としてはとらえられていない。古代人の宗教観というより、世界観でも必ずしも負としてとらえられていなかったのではないか？宗教を錯認としてとらえたところで問題にしても、死に様は生きざまであるというテーゼからして、充実した生の中にある者にとって、死ということを負として迎えるということは必ずしもないような気がする。笑って死ねるということはあることである。

さて、問題は病気ということである。病気と障害はかなり共通性をもっていて、障害ということで語れる側面もある。語れない問題としては何があるか？それは時間的継続性の問題だと思う。病気の時間的モーメントに関しては二つの側面がある。一つは治るという問題。病気を負性として、その負性＝病状が消失するという問題。もう一つは、明らかに死向かって進んでいるという問題である。この規定性から外れるのは、いわゆる、病状ということが固定化することによって障害という概念に転ずることである。

死に至るということについては、死についての論考とほとんどオーバーラップする。障害についても同様述べた。残る問題は、病気における苦痛の問題である。病気における苦痛ということで、いわゆる精神的問題については、ほとんど障害者問題に重なる。問題は病気そのものの苦痛である。これについても一般的に語れないし、当子と者性ということがあって、そんなこと他者に分かるかと言われたらそれまでというようなところがある。確かに、七転八倒の苦しみをしている人から、痛みを消してくれと言われて、「その痛みは負性なのか？」などと応えることはできない。

けれども、けれども。そのことが、後になって振り返ったとき、その病の中で得ることが多かったとして語られることはある。更に、我々は、病に遭う、病から死を迎えた人の多くの、素晴らしい生き様＝死に様として語られることは、枚挙して枚挙しつくせない多くのこととして我々は知っているのではないだろうか？そのような話への出会いは、病気（や死）を必ずしも負価値性としてとらえられないこととして、一定提示しうるのではないだろうか？

先日テレビで、マーガレット・パーク・ホワイトという写真家のドキュメントを扱っていた。「人の写真を撮るとは人の命を取ることで」、というような写真を撮っていた彼女は、パーキンソン病に遭う中で、自らを被写体として投げ出し、「この病気にかかったことを、もし消せるとしても消しはしない。・・・・・・この病気はことばで言い尽くせないかたちで、私を他の人達に近づけてくれたのです。」という言葉を残して逝った。

私たちは、障害者運動の素晴らしい先達を知っている。その先達も、障害者は素晴らしいという生き様を示してくれているのではないだろうか？

障害者の文化、障害者を主題にした文学の中に、障害が必ずしも負性ではないというこ

とを明らかにしうる。大江健三郎は「個人的体験」で障害者の息子をもった直後の体験を小説にしている。それから二十年近く後に『新しい人を目覚めよ』を書いている。「個人的体験」においては、自分自身の倫理観を巡る葛藤のようなことでしかなかった。そのことが、二十年後には、その間に色々な思いが交錯したに違いはないだろうが、息子とのふれあいの中から実に鋭い豊かさをもった感性としてその変遷を示している。

私たちは、繰り返し障害は負価値ースティグマなのか？と繰り返し、問いを発し続けなくてはならない。もし、障害がスティグマだとすれば、それをスティグマにしているのは、この社会そのものがスティグマとして作り上げているからではないだろうか？

（注）フロイトの「無意識」の概念は極めて性的な概念である。今日、そのことを物象化的錯認として片付けてしまう傾向があるのだが、この「無意識」を「共同主観性」の問題として援用しうるのではないかと思う。

吃音は「どもるまいとして、なおさらどもる行為である」と規定されていて、「どもるまいと思わなければどもらない」というテーゼが吃音者に突き付けられる。

このテーゼは「どもるまいとは思わない」と意識的領域で思っても、共同主観的なところで、すなわち社会的な意識として「どもりは悪いもの劣ったもの」という意識があるところでは、「無意識」の領域で「どもるまい」という無意識の意識があり続ける。そのテーゼ自体の論理的破綻と更には抑圧性が明らかになる。

だから、共同主観的意識を問題にする、その意識の有り様を問題にするという方向性が提示される。